

校長あいさつ

沖縄県立八重山高等学校 校長 仲舛盛順

八重山高校は、八重山郡民の熱い思いを受け1942（昭和17）年に開校した沖縄県立八重山中学校、沖縄県立八重山高等女学校をその母胎としている。1947（昭和22）年の学制改革により2校は統合され八重山高等学校となった。八重山高等学校は、今年76年目を迎える八重山地区唯一の普通科高校（1学年6クラス）である。校訓は「学徳」「進取」「雄飛」で、「師弟同行」を校是とした教育活動を推進している。

ここがすごいぜ、八重山高校！

～毎月1回、八重山高校の歴史・実績・良い所等を綴ります～
（記述内容に間違い等ありましたら、八重高までご連絡ください！）

校内にある当時に偲ぶ像や施設

八重山高校の校内には説明板がない像や施設がいくつかあり、外部の方々から質問されたときに説明に苦慮する事が多い。先日も、「聖火の像は、元体育教師の嘉数重夫氏がモデルではないか？」という問い合わせがあった。2年後の東京オリンピックの聖火リレーが話題になっている時期なので、前回の東京オリンピックの聖火リレーに関する出来事を調査している方からの問合せだったようである。私自身も、校内巡視時に気になっていたもので、創立45周年記念誌と創立60周年記念誌、1962年度から残っている学校要覧を調べてみた。まず、校内にある4体の像はすべて八重山高校第5代校長の平良泉幸氏の作品であることが当時の学校要覧に記されている。以下、時系列で制作年月日を記しておく。

- 1963年3月27日 第5代校長 平良泉幸氏赴任
- 1963年9月12日 師弟同行像建立（平良校長作）
- 1964年3月23日 読書像建立（平良校長作）
- 1964年8月19日 健康像建立（平良校長作）
- 1965年7月29日 大鷲の像建立（平良校長作）



創立記念誌にある写真

因みに、1964年は前回の東京オリンピック開催の年である。創立記念誌の1964年のページには上にある聖火リレーの写真があるが、説明文がないため誰が写っているのか？どのなのか？いつの写真なのかも分からない。ただ、健康の像は誰が観ても聖火リレーの像であり、八重山でも聖火リレーがあったことがわかる、どなたか写真に関する情報提供をお願いしたい。



師弟同行の像



読書の像



健康の像



大鷲の像

右の写真は、校庭にある手洗い場跡（今は使用していない）である。先日、第19代校長の石垣久雄氏が本の寄贈で来校した。その際、この手洗い場の話になり「校舎改築の時、昔の施設で残っているのはこの手洗い場だけなので何とか残してもらった。今後そのまま残してもらいたい」とのお話があった。石垣氏は1955（昭和30）年八重山高校入学で、入学時には手洗い場はもうあったと言われた。調べてみると、1952（昭和27）年の創立5周年記念誌に、手洗い場は載っていない。1962（昭和37）年の学校要覧には、教室配置図の中に手洗い場があり、施設一覧の中に水道施設1とある。それからすると、この10年の間に手洗い場が作られたことになる。創立記念誌の中に、八重山の主な出来事の1957（昭和32）年6月22日に上水道通水記念碑除幕式挙行とあるので、その前に作られた可能性があるが、校庭にある手洗い場に関する記述は見つけることができない。説明板をつけ、その存在意義を後生に残したいのだが何とかならいだろうか・・・。



校庭にある手洗い場の跡

25年も続く卒業生の行事「教育フォーラム」

八重山高校には、25年も続く卒業生の行事「教育フォーラム」がある。この行事は、八重山高校を卒業して25年後の43歳の同窓生が企画・運営する。企画・運営者が毎年変わるので、やり方が毎年変わるため在校生の評判は良い。

この教育フォーラムは、現体育館の落成式典（当時は伊波寛校長）が行われた1994年7月8日に先立って同日の午前10時に第1回が開催された。当時のテーマは「先輩は語る～卒業25年の集い～」で、第1回は21期生が後輩たちを激励した。新垣弘行氏（当時オキジム八重山支店長）をコーディネーターに、高嶺善伸氏（当時市議会議員）、西村庸夫氏（当時沖縄銀行石垣支店長）、仲原靖夫氏（当時ハートライフ病院長）、与世田兼稔氏（当時弁護士）、波照間永吉氏（当時県立芸術大学講師）、小浜清志氏（当時作家）、小底弘子さん（当時保母）ら7名がパネラーであった。

今年は第25回教育フォーラムで、第1回教育フォーラム時に当時高校3年生であった45期生が担当した。下の写真にもあるように、パネラーの服装も統一し、在校生に楽しんでもらえるような参加型の教育フォーラムであった。この教育フォーラムをきっかけに、八重山高校同窓会（尚志会）が尚一層団結し発展していくことを期待したい。

平成30（2018）年 7月



夏の甲子園に1番近かったあの日

今からちょうど30年前の昭和63（1988）年7月23日（土）は、八重山高校野球部が夏の甲子園に1番近かった日である。

第70回全国高等学校野球選手権記念沖縄大会は、昭和63年6月23日に開幕した。同年4月に、那覇在住の八重山高校同窓生が中心となり「八重山高校を甲子園に行かす会」が発足し、八重山高校野球部に対する支援体制が整いつつある時期でもあった。その支援を受けた八重山高校野球部は、瀬名波長宏監督の指揮のもと一戦ごとに成長し、強豪校を破り決勝まで登りつめた。まさに、「夏の甲子園に1番近かったあの日」があったのである。八重山高校野球部の当時の夏の戦いぶりは、次のようであった。

1回戦：八重高8－0コザ高校（8回コールド勝ち）

瓦投手がコザ打線に6安打を浴びながらも要所を締め、八重高は10安打で8点を取る効率の良い攻めで快勝した。

2回戦：八重高6－4首里高校

八重高は初回、先頭打者の伊舎堂が大会13号のホームランで先制した。その後、16安打の猛攻を見せ、七回から登板した大松の好投もありシード校の首里高校を退けた。

3回戦：八重山高校9－2那覇高校（8回コールド勝ち）ベスト8進出決定！

七回まで相手投手の緩急自在の投球に翻弄され、八重高1－2那覇高校であったが、八回打者一巡の猛攻で8点を取り逆転した。

4回戦：八重高5－4美里高校（延長11回）初のベスト4進出決定！

延長10回まで、八重高3－3美里高校であった。同点で迎えた延長11回表、八重高は一死から4番大浜のヒット、5番金城のヒットエンドラン崩れで二死二塁。このチャンスに6番瓦のセンター前ヒットで1点、相手エラーで3塁までいった瓦を代打唐真のヒットで2点目を入れた。その裏、先頭の豊見城高校4番柴引が大会17号のホームランを打ったが、無死一塁からリリーフした大松がピンチをしのぎ勝利した。

準決勝：八重高5－2豊見城高校 決勝進出決定！

一回の攻防が明暗を分けた。先攻の豊見城高校に1点を先取されたが、その裏、1番伊舎堂が内野安打、下地が四球の一死1・2塁のチャンスに4番大浜のヒットと瓦の内野安打で一挙に八重高3－1豊見城高校と逆転に成功した。その後、3回に2点を入れ八重高5－1豊見城高校と引き離した。瓦投手は、2回以降得意のカーブを要所に決め豊見城打線を翻弄した。9回に豊見城高校も意地を見せ1点を返したところで、リリーフした大松投手が抑えて振り切った。



決勝：八重高0－8 沖縄水産高校

強豪沖縄水産高校の前に力をついた。試合終了後、コザ高校戦から決勝まで6試合を投げた瓦投手は、「精一杯投げました。うれしいです、悔いはありません」と涙を拭いた。

今年は、第100回全国高等学校野球選手権沖縄県大会となる。あれから30年、再びあの日が来ることを期待し、今度こそ悔し涙ではなく、うれし涙を流してみたいと願っている。



平成30（2018）年 6月

八重山高校のカラーガード部がすごい！

放課後、管理棟玄関前で大きなフラッグが舞っている。八重山高校のカラーガード部の部活動である。小気味よいリズムに合わせ、20名を超える生徒がフラッグを振る様子は圧巻である。

このカラーガード部は平成17年度に発足している。当時、国語の教師であった赤嶺剛先生（現今婦仁村教育委員会）が、小中とマーチングバンドが強い石垣で何とかその受け皿を模索した結果、結成したのがカラーガード部だったそうだ。赤嶺教諭の呼びかけに応じ、当時2年生だった富村万理代さん（現県立高校養護教諭）を中心に部員が集まり活動が始まったそうだ。

八重山高校カラーガード部は発足以来県大会を勝ち抜き、マーチングバンド全国大会カラーガード部門（名称の変遷あり）において7回の金賞（全国2位含む）を受賞しており、県内でもカラーガードといえば八重山高校といわれるまでに成長した。今、カラーガード部は新入部員も含めた陣営で、11月に行われる県大会優勝を目指し、溢れる汗と戦いながら練習に励んでいる。

平成30（2018）年 5月

黒島口説（くどうち）に魅せられて！

八重山高校郷土芸能部が歌い演じる黒島口説（くどうち）は凄い。舞踊が良いのはもちろんだが、歌声はもっとすばらしく、多くの聴衆を魅了する。潑刺とした歌声は魅力的で、特に「いやい～や、豊かなる世の・・・」以降の歌声は、女性ならではの高音と力強さがあり、聞く者に感動を与える（と思う）。

私が八重山高校郷土芸能部の黒島口説（くどうち）を意識したのは、前回の八重山勤務6年の終盤（平成元年あたり）で、石垣市民会館で八重山高校郷土芸能部が演じた時であった。あの時から、八重山高校郷土芸能部の黒島口説（くどうち）に魅せられ、それが今回の再赴任の理由のひとつにもなっている。

※八重山高校郷土芸能部は、1994年に全国高等学校 総合文化祭郷土芸能部門最優秀賞・文部大臣賞を受賞している。

平成30（2018）年 4月